



重修真書太閤記

九編
六

13
459
86



18 特
門 5
459
卷 86

福永

重修真書太閤記九編卷之十六

羽柴宰相秀吉卿長嶋登城の事

并近習の健士勇烈の事

織田内大臣信雄公ハ秀吉參上と聞食と云々此の
の一人討捕あひ天下ハ自然と御手入へしと思
召し下處秀吉の使者堀尾茂助吉晴御玄關より伺
し内府公へ御太刀百腰御馬百疋御小袖百緋子百
卷縹子百卷御簾中へ綿五百把を獻し家老衆より
ゆ近習衆取次衆門番衆中より選りし厚く進物あ
りしりらへさても大器量の大名うみ是より織田家

同政
會印

大月記九編卷之十六

の譜代衆丹羽龍川以下の面々參上ありつども
めりとの獻上の進物を一の見も及ばず聞
をば不思議ありける大将ゆと一人り褒む二人
るめ三人四人誰一人羽柴秀吉郷をとりつめのか
く御簾中も懇々思召けるゆとよ終に内府公よ
もめく追進獻上心を用ひし能々厚志と知
たりそとと害をんととらうりし三郎兵衛り偏執
の心よりおのひたち我も勸めしめりし
然い秀吉とやもくと打果さんと故大臣尊靈の御
意よも違ふべしとたのひ直されけるゆと不思議
はとととくく夜明けし長嶋城内より門番取

次つどもものゆ秀吉參上あるべしとととく
用意掃除その外念入て待けるゆ森勘解由飯田
半兵衛二人の書院の次の間の衝立の陰に隠して
會圖と待て扣たり秀吉初に故右大臣殿と主従の
禮ありつども今に從四位下の參議ありつども朝
廷の臣より故右府私の臣よありびのんや内
府と主従の義あるよ非は因てととくの禮式よ
織田家譜代の諸將と一列ありび秀吉とくよ追手
の門を入るひゆと本丸の門を入るひ淺井田
宮丸玄關の式臺よ出迎ふ取次の衆其負多く居並
ひたし共つども參議秀吉より音信を受たれ

殊の外に敬屈してを扣えたり淺井田宮丸とて昨日太刀馬小袖等を受たは何とあり追従して先よこし秀吉より引續いて何ののりあり知と肩衣と袴の側高く取たる侍十二人殿上を睨て跪と居たり淺井田宮丸秀吉より向ひ遠路の所早々御参向内府殿も殊の外満足よむわしめし因て急々御對顔ありをらとて思召先刻御著座ありをらとて御案内申と云つ立上り秀吉卿も同く奥へ入るを見り侍十二人一同に玄關より昇りし取次衆あり何ののりあり狼藉あり但羽柴宰相との御家來衆御座敷拜見の

心得りといふと十二人のの共結構ある座敷へ京より何處も見ては長嶋あんと田舎普請見たりもなほ今日只今主より宰相秀吉と閣下より由承り及ひては主のなりは様と見物仕り相從ては元より命と棄て我々もこの名もあつ幽霊とて申あり岡田長門守秀吉より向ひ御家來衆多く御座敷より狼藉し昇りては御思召ありてゆり連られはと申けは秀吉卿更存知不申但秀吉と討をたまはんとて斬手より御定めより大坂まで聞えはより年來秀吉の恩と受との無沙汰は尤様の振舞い

九陰部カ紛義一六
ゆり存をぬゆと答あへハ長門守その十二人の眞
先よとてこゝ男よ打むりひ其方ハ柴羽宰相の家
人なるう何れのどとりつゝその侍りの星崎の岡
田との名乗るとも知とあへア一但今日主人秀吉
大厄難ありと告ゆめの有之よより名もやるとの
の宰相よ息とうけ一幽霊ともよとけ生たるの
みゆとて御殿の上よ憚もゆとめ死したる者の魂魄
のりよ形を顯くたるまじハいりなる高貴の御
殿たりとも恐もいこまぬとてありもあつといふ
長門守もそのののをうくみまの福嶋正則ありふ
とていもいこ一幽霊といふ詞よ付て迷故三叟城悟

故十方空本来無東西南奈何行有南北無幽霊領證
菩提とのひて引くつゝ側へ引入音もとて津川玄
蕃元立出て十二人よ向ひ幽霊たちハ何事と聞た
うへらまて是中を御入ゆとて宰相秀吉卿を闇打
よをんあつと申こハ全以て虚説とて更よ爰許よ
尤様の企ハ存もよらぬ定めて内府公と宰相殿
との中間を妨げんとていふゆめハさうしらある
へくゆ能々御穿鑿ゆとて自然明白よなり可申ゆ
併尤様よ聞込とてゆめハ容易よ御帰もあ
るやうくゆゆへとも今日ハ内府御昇進の御勸ひ
とて宰相との御参向よ幽霊衆多く召具よと

ふと似合しうらばの御禮式の齋いせうし陰に
御うしと被下アとりの十二人のののつと
よ扣可申哉とりよ玄蕃えさのい爰よ御休息の
へとて飯田と森との側よ押ゆたは十二人の
のの森と飯田を真中よとりあめ膝つとけり
ゆとまゝ森と飯田も秀吉卿より音信へけり
りまゝとて有のまゝよひ出れつてもあは實
よとて塩として相あゝよ玄蕃えと長門守と兩人
内府公の御前よりてうねとの内義のうあて大
坂へのとてかゝん最あゝこの事よてい我等四人
の外よ殿と森飯田より外よ知のめあゝ密事あり

とて顔見合を互に疑ひをゝてけり内府公ハ元
より臆病の本性あり此事のしたるんよの秀吉い
めあゝとせうのひ出ん嗚呼と六くゆと俄に癩
氣さゝ起り臥めさえあへ四人ののの様々女抱
ふのよとてもとくくあゝあゝのてい御對顔
もあゝとてあゝ時をうつしけるあゝ秀吉卿
今朝辰の刻より參殿仕りゆよとや午の貝あゝ終
りても御對面あゝのい秀吉と暗討よと御と
めりゆひしこの漏しよと御不興とあゝゆと
覺えゆと退出仕りゆとと申さゝげらよ
り淺井田宮丸より出只今内府殿俄に癩氣さゝ

起り療治つこさしゆやうと和らさ可申ゆ少しの
間御休息ゆへりしと取持しりとも秀吉卿の御
御癩氣といひゆる緩々御保養專一ふ存ゆ御城下よ
止宿仕ゆ間御全快の上御對顔可申ゆと申とて
るゆ秀吉卿座と立あふよより淺井津川岡田の三
人もおとせと止めん詞あく手と摺て後よ付玄關よ
つこさしゆの十二人の侍とも前後と打うとて
退出しげさう追手の門よつこさしゆ頃仙石權兵衛
合圖の螺を吹立とて何處よのく置たりげん秀
吉卿の馬廻り衆百二百つ馳あつまり忽六七千
餘よ及ひげさうつこさしゆ下よ鏢と着たるもあり

すこし具足したるもあり一二町行あへ前後左
右の隊伍と定め三万余騎よと旅宿の寺院へ入む
ふ織田家の侍も家老衆も肝をひしこれゆと大勢
よとありやうこさしゆとく到着の日にさうふ二
三百人よとありげさうゆめゆめと此大勢をいつくみ
くし置たりげん不思議の事よとめり合つて驚
きとありあり内府公よも此由聞あひしりあさ龍
川三郎兵衛り勧めよより秀吉と中違ひとこの
口あし暗打と仕損しとて此後秀吉と面會した
らん時何とゆふと心の内よあう恐怖し
あひしゆ癩氣つこさしゆ込けるよより其夜も

籠て打臥ひける夜はなほの故右大臣殿お
けは深む御姿とあうこれあひ明智う為は無
念の死とあいつとも秀吉の忠義よりつと
め苦患と免と一のものど其方達の企より又のや苦
とよりさびるこの不孝人と睨まをあふ御眼の光お
とろく現も猶見えむひけるとして内府のまを
まをあゆみあふ又家老ならぬ打よりつと
て闇打の密事のしたうげん是は必定六人のうち
ふ反り忠のめのあるへ誰なるらんと互ふ心を
置合けるより長嶋城中心々ふあり朝暮のそ
ろ事もて笑の内は又をめくをう如くありふたり

是ぞ内府の家老四人を誅せしむるこの張本あり
けり

北畠家の老臣大坂へ来る事

并宰相秀吉卿反間の事

羽柴宰相秀吉卿の勢別より大坂へ歸らむをあひと
とより高山峰屋中川其外織田家の功臣たどり
招某ありして申さるる今度北畠殿内大臣ふ昇
進ありはるより秀吉も御歡のためよりあふ勢
州長嶋より四十五里の道と下向ひて御太刀御馬
御小袖板の物巻物等秀吉より身も隨て献上し御歡
と申つる何事と疑ひ思召てり御對面もひく誠

かゝる秀吉と暗打と打とあふへと由よと討手追
定めらばと申ののもあり如斯てハ何時し
秀吉討へとて軍と起しあふともあるへく覺え
但秀吉故右大臣殿の御恩と蒙りし事ハ須弥山の
つてひさく大海猶あさく存しゆより一命と
とて右府公の御仇とち又御菩提のさめよ總
見院と建立しし事面々存知の上の事よ當城
と築さし右大臣殿のささり執し思召つる地
ふとハ御志を果さんる為と營造のささしゆなり
天下と泰平と朝威の八嶋の外と及ひし様よと右
大臣殿の思召し御志を繼可申と朝覽よ心掛し

上勝家と如し私の偏執より秀吉を討んとて却
て滅亡し及ひし事秀吉よとにゆるとハ存をば
得とも止とと得ざる處あり三七殿の御自害ハ
御家來の逆意よるとのゆとも太平と御本意と
なきとあふ御父君の御心よ戻をあふあり只今
天下武士の棟梁と申奉るハ中納言秀信卿よな
しよ去天正十年六月下旬清洲よ於て秀信卿御
年十五よあふとあふ追万事柴田修理進羽柴筑前
守池田紀伊守丹羽五郎左衛門尉四人とて取行ふ
へと旨定め一處よ勝家一人の心と以て天下と亂
さんととて天理よとむと入望よとあふ

如く成行ひひしと内府公も御存知の上よとい
ののど全く説者の舌頭より不思議の御事と思召
立をよますしとあもあつて各故右府君の御恩を
忘しめくばへ中納言殿の知をよみ天下を亂し玉
ふやしくいと申されし何れも其理を甘んし何
れも宰相殿の仰をらむし處よとよ正道の本意よ
ひ我等式何ある事いと中納言殿の御下知よみ
そ付いよめと申けるよより秀吉卿よもさもいへ
けむと宣ひそのうち勸盃の事ありと諸將をてよ
退出をとんととよ時筒井順慶法印申さむけり某
津川玄蕃元と懇意の筋目いへ内々よと取愛ひ

申へしとありし時秀吉卿ともうくも無事と第一
と存いと答へよよより順慶法印元より北畠殿
と疎くもあつてさりけるよより箸尾宮内と云の
と使とて津川玄蕃と呼びけり此玄蕃元の妻は
北畠權中納言具教卿第四の姫君よと内府公御簾
中の姊君ありけり内戚よとて諸臣ありま
親しと結ふよとありしよのよとあり又筒井
と興福寺東門院僧正具親とい日頃親しと中あり
僧正の具教卿の弟ありしよとて筒井とて愛
とんととありし然るよ順慶法印早世ありし
よより此和議遂に整えたりと聞えたりされと

も津川一人の了簡りょうかんも及およぶるより岡田淺井
とも相談さうだんしつゝも此節このせうの秀吉と矛盾ひりひり及および
ての御本意ごほんいとつけあふと難がたうるへし兎角とくかくとらう
ちよ三七殿の如くあつとあつと物体ぶたいありと申
上しうの内府公の本性臆病おくびょう第一だいいちしく決断けつだんあり
御方ごほうありの筒井と頼たのみ様々さまざま急状きゅうじょうを立ちあひつゝ
とあも中納言殿成長なかつなごんすて万軍羽柴宰相ばんぐんとり行ゆひ
あふへとこと當然たうぜんの事ことと頓慶とんけいより披露ひろうをいあふ
秀吉卿しゅうきやうあも尤なほ様さまと仰おんせいの天下てんかの穩しんくみ太
平遠へいゑんうらひさりあううらういやく内府公の思召しめいの
あとも伺うかがひ秀吉しゅうきやうの本意ほんいとも申上まをへくひ間家老まがやう

衆三人大坂へ御越ごえあふへくひと飛札ひさつと以て申け
るよもう津川岡田淺井三人打寄うちよせのくあるへと事
との存ぞんてあひひとあうとて飛札ひさつの趣おもと内府公
へ申上まをげる處ところは内府公のう様さまも秀吉と無事むじと
調しらのえいへと仰おんらるるよもう三人大坂へ出立でだての
用意よういとあひげるよ瀧川三郎兵衛内府公へ申上まをげ
るよ此度このたび筒井家の取次とりつぎすて秀吉と御無事ごむじよ及および
の趣おも恐悦おそえつよひ右みぎよ付三人衆しゅうと大坂へつうとこと
の由よしゆつ以て當御家万歳の御慶ごけいと奉存ほうぞんひ但秀吉
と討果うちくわとへと計畧けいりやくともらうひのの三人衆しゅうの内か
るへく存ぞんひとこと付拙者せつしやも三人と共に大坂おおいよ至

大坂已乙編卷十一

三人衆を取扱ひひりりと見ゆりつゝ返り
忠をいぬのう又ひ返り忠をさるめのと申處の
分り申へくいと申けるよもう内府公まゝ何の思
慮もなしく三郎兵衛へ秀吉と懇意のめなり三人
衆と同道あつて便宜もあるへと旨と下知を
ふよもう三人衆も同心し四人一同は大坂に到り
しうへ秀吉卿をふち城内に呼入蜀江の間とて
蜀江の錦と障子とをり座敷へ請へ良ありて
淺野増田石田大谷あつて出會一人つゝ案内し別
別の座敷と設てめてなりあひひり座敷の容体掛
物の書畫盆食籠のめさう同一様あるめのと有へ

と由あびまへ自然に優劣と分別し如くおのれ
たりそれとつゝふと云し牧溪の龍席と虚堂の墨
跡秘色の香爐と漆付の火屋あるひ座敷の上下
たゞそのうを僻める心あり嫉し口惜むもあのみ
置あつて其後瓶子と出されて山海の珍味を
置あつてさして淺野案内して津川とめし秀吉
郷對面あり例の大音とて遠路の處早々御出大慶
よいとつゝさしおのち小音とて先頃長嶋表に於て
御懇切の義とてさうとつゝおのれとも玄
蕃は何事か覺えなまことありし和義の妨げもあり
ていと思ひたゞ首をさげて謹居たりとてさしとも

次の間も居たる三郎兵衛の長嶋もて御懇切の義
ことごとくと秀吉ののこし詞を聞とうめ
うとも障子を隔といふも聞えは又津川申詞
へとも分らば秀吉の大音よある御家老ふ
め其方の御間々何様もゆるく頼むと申
詞のそなたより聞えしうの三郎兵衛の意よとて
の玄蕃えう漏をよゆと思ひけるうちよとて秀
吉郷の聲よて其方の北畠の一族衆よとい内府公
よ拜謁をよも同一心よゆと云つて秀吉の帯した
る脇差とあはれ是は來國俊の作よの随分覺のめ
のよゆとて賜うらうの津川御禮申て退座を其

次は石田の案内よて岡田長門守も對面あり龍川
ゆと何と云ゆんと障子よ耳をよとて聞ける
よ秀吉の詞たしう聞とて只先頃ハ格別の御
心配りといふ處のよとて聞え又力一腰をお
たく小音よのよとて詞のよとてあはれたる大將
軍と討て榮花よとてゆへとのよとて處んうり
あはれうと聞えしう龍川り心よ然ハ津川と同一
く岡田も秀吉よ親しことあはれたりと心の中よ
おのひげり岡田退座のよ増田の案内よて淺井
田宮九龍出よの秀吉郷近々と呼寄小音よ何事を
ういよとて聞とてと猶々耳引たて

聞ハ其方ハ別ニ年來の心入の...
其方懇意あるに進むる...
三郎兵衛の...
浅井の聲...
下太平...
声高く北畠殿の御内...
馴染ふ...
の事打...
頼入...
浅井...
返

辞ハた...
吉と入魂...
衛心の中...
うつ...
け時節...
て三人衆...
暗打を漏...
うけり...
る...
とへ...
殿此方...
一間

一通りなり

重修真書太閤記九編卷之十六終

重修真書太閤記九編卷之十七

龍川三郎兵衛反問中事

并三家老横死の事

斯と龍川三郎兵衛ハ大谷ウ案内ヨ從ヒ秀吉卿ノ
拜謁セシ處秀吉卿申ササマク様此度の始末筒井順
慶法印志スリヨ執扱ヒ申ササマクヨ内府様御
思召直サレ由御家老衆ノ口狀具ヨ承リ御尤ノ
御義秀吉ノ於テ元ヨリ別心ヲ存セバハ段御返答
申上ハ其方ハ北畠殿御一族ト申御側ヨ御奉公ノ
なさし間別シテ厚ク御取持あるべく存ハシ

此の事も中納言殿御生長まての處大切の能々御
輔佐申さるるは是の見くるはへとも秀吉
隨分秘藏の品ふい道中着用いごとく白羅
紗の羽織二領給りて迄は親しく口状も
あり三郎兵衛謹て御禮申御説の趣り
時々申上は様可仕いと申さとも秀吉さうり懇意
の談もあへる危相の料理申付は緩々参り様小と申
て秀吉卿の奥へ入あふ三郎兵衛心中は此二三年
ハ疎遠は過りあはとも我あそは秀吉卿の木下藤
吉郎といふこと頃よりの懇意あは定め懇意の
のめりあるはとあはひは處三人衆より疎々

くその上はいつとも太刀刀とめりひたるは我
ふの羽織二領りやうは優劣と立らるるは
そのさしては三人衆の我等より此節親しく往來を
るにあはるはと深く積りつは口惜くあは
居る處は又大谷出來り秀吉申付らば料理鹿末
あうりやう上らばは様と挨拶して二汁五菜の
膳部とめりはとひり三郎兵衛めりはあは由
と申て是を喰てははは大谷あはへは立出て遠
方御越の車ふの間何ぞと被申付はへとも折節不
獵まて何もあはも氣の毒ふ存いと申さとの事ふ
いとありて其後三郎兵衛殿の秀吉のまは藤吉

即と申せし時親しく御面會申せし旧交もいゆ
る御使の始末ハ相とらひ此方へ御入ゆへと申
ゆとのへハ三郎兵衛あつてハ驚さうあることと
いふるもあつんとハあつてハ又大谷も就て
立上との實も當時の大器量のものと世の沙汰もた
うとハ金銀とらうとらハ座敷幾間とあつて通うの
めて庭も出との池あり築山あり實も仙境も入
み似たり築山の蔭も茶屋ありその茶屋も入ハ床
も唐繪の掛物をうけ棚も盃山食籠喚鐘さまくの
繪巻物うとも知とを置並へらとらう三郎兵衛肝
とつみせも不思議の大將うあとおのひ居た

へ大谷あつてあり奥へ我等式ハ參らとていゆて
御案内ののの出へくいと申て大谷ハうとへ引
退くまらありありと奥あり十六七あもゆと思ふ女
出來り此方へ入をあへと云て三郎兵衛と伴あふ
三郎兵衛心神恍惚として跡も從へハ女障子の許
みゆへあり御客御入ゆと申をハ内より秀吉卿
白衣の体もて立出らとあつてとつてとらうと
り入てみとの竹の簀子の上も庭敷圍爐裏も掘揆
折くへ自在も金うけらとらう三郎兵衛も驚さ
るはのうあることとあつてハ秀吉卿のうり
の縁もあくらうと源城院殿もあつて御入ゆへと

のこころごとく三郎兵衛もさし心得いりよも源城院
と申せし頃ハ藤吉郎とのと御名乗ひひさこと云つ
川打笑ひあゝくつろり又副て座たり其時秀
吉卿いそれけるハ某の体ありし時ゆひひか
り然るは明智といふめのおりて故殿を害し奉り
し故某御敵を打今ハ四位の参議とあり日本ハ八
人の官に任とせしゆいさこれハ人の果報と云ハ不
思議のめあり源城院どめ三郎兵衛どめ三郎兵衛殿又
伊勢國司とも御ありあるやうさあもあはれと
云て大音も笑ひあへり此座敷の又三人衆あハ淺
野石田増田のどめく立出てさまぐりてあハ山海

の珍味と盡したる料理をのこさしたる中あもと
くして珍敷ハ鯛の生作りよて其鯛の大さ大形二
尺餘あり然も三人へあゝ様よのこさしたるさ
て料理もとも薄茶いこさしめつらし菓子見も
及むハ聞もをば三人衆心のうち小下藤吉郎と
て信長公の草履取りのめう如斯すて立身とせし
るハ驚きもしつ感心もしたりけるらあハ大聲よ
めめいふめめあり誰あらんあハ書院あり此あ
たりハ秀吉卿の居間も近うらんといふりり
ハ淺野さしてあの聲ハ秀吉あハあの書院の板壁
一重とてて秀吉り常よ打とげて住らべる座敷

ありそれへ我等とさへ入らば然るも三郎兵衛
 とのいむりの好一方ありべと云て請し申され
 一うあの聲ハ三郎兵衛とのとのめめりつこさ
 といふてあるへくいと申けといハ三人衆のつこも
 打傾さ三郎兵衛ハ元北畠の一族木造の三位俊茂
 卿の三男あまとも具政卿と養子として家督とゆ
 つりあひ一うハ三男の實子と木造の源城院とい
 ふよ住職さを修験道と立ちま一めのなるる還俗
 して瀧川三郎兵衛雄親といくらもなう筋目正
 く木造御所となりあふへこのめめいあの体よて我
 等う末座たるう筋目あま木下藤吉郎ハ四位の參

議し昇りあの大坂よめくる大城を築き其主とあ
 りたることよその秀吉何のいことありてう我等よ
 之越三郎兵衛をめてふとやうんと心の内よ移こ
 く思を理なり頃て三郎兵衛へ暇とあへハ秀吉郷
 三郎兵衛よてハ内府殿の御使あり源城院よてハ
 昔の交あり何と進をても苦りうらばと云つら傍
 りり黄金三枚取出して源城院との御祈禱料あり
 とのつて取をとり三郎兵衛心中よすよ驚ささそ
 由心の底のよまぬ秀吉うみさりとて刀のうみた
 るよハるるうよ増たりと悦びて懐ふあういれた
 とい秀吉とてハ三郎兵衛のうらぬことあり誰

あつて座と立表の書院へ立ちのつゝ三人衆待つつけとい
ゆふ三郎兵衛のくへ行くや我等へ今度始てめ
まあつて案内とくらび其方へ度々相越とくあつ
といふ三郎兵衛のや拙者も今度くめてふひと
いふ三人衆それと合せての御座敷の案内を知る
るとこのいふいふとつゝいひのや大谷う案内と
といふ時大谷罷出三郎兵衛との大谷とい某とい
といふいふ今すて案内したる男にあつて三郎
兵衛も仰天とて口を閉たり其うち秀吉卿三人
衆と暇をとりとんとて又書院に請入細々と埃

授ありてのち三人衆退座あつて三郎兵衛を召出
されりと福ととこりいひつれて外に辭あつてそれ
より四人一同に立歸りの禮をつとめて旅宿へめ
へり互に秀吉卿の噂とあり太力刀と見くらべを
のちの得意の處にて三郎兵衛の何をう贈り
と尋ねけるに羅紗の羽織二領のうひいとつゝ三
人衆あつてそれにあつていふうろぐりその外に
何うあるやといふとて三郎兵衛又驚ささくは
黄金三枚のことと知たるよやあつてと秀吉の懇意
よのをよとつゝのものと漏とてさ非とあつてい
もあつてと答ふると三人衆に三郎兵衛の厚と贈物

ありつゝんと推量りうの書院の裏ある常の居
間申と通りしことおもゆくしつゝと實は不
審ありとちのひしと何となく三郎兵衛をい
ふをさめめよめひひりさく四人のめの長鳴よ
めへるや否三郎兵衛其夜登城しと三人衆と秀吉
と隠密の交わりとひひめの大坂よを聞たりし趣
と具さよめりしうの元より思慮ふと内府あり
三人衆と討てととんとしうりきけり三人衆の翌
日登城しと秀吉の御返辭を申上りうとも内府志
うとしたる答もあし三人衆ひそりよ瀧川うこと
申上げしに内府三郎兵衛の秀吉の藤吉郎といひ

一頃親しくとものなりととらりよと外と何と
もいしと直に奥へ入るひ飯田半兵衛森勘解由
とゆし出されゆくと申付らまその明る日津川
玄蕃先述春と召して隠密の御用あり奥へと仰出
され玄蕃先何心あり奥へさしと行處と廊下よと
飯田半兵衛仰あると云つと板打と切付たり玄
蕃脇差の鐔よと請留何仰とゆといひける處とた
たさうけ終り切あをたり其次と岡田長門守とめ
しひれをも森飯田兩人しと打留たりとの次と淺
井田宮丸と打とこしけるよ玄蕃えり家來とらり
返り此由と注進したりけるよあり玄蕃う弟津川

彌次郎中村三右衛門神田次右衛門松う嶋籠城
 一けるを大勢推寄しう忽に落城し彌次郎
 の戦死し三右衛門と次右衛門とい大和路さして
 落失げるより城を龍川三郎兵衛に賜りた
 り又岡田う弟勝五郎一族ありける坂井下總守前
 川助左衛門天野五左衛門喜多野彦四郎山口半右
 衛門星崎の城に楯こりけるを三州菊屋の水野
 宗兵衛忠重嫡子藤十郎勝成不日にお寄鉄炮を
 打げる火箭と射て小屋ともを焼たりしうの勝五
 郎以下うめ城と開て落たりけり淺井の城の
 籠城すとも明くいけり

甫菴本太閤記よ天正十二年三月三日於勢州長
 嶋の城津川玄蕃勢州松岡田長門守岡田長
 崎城主尾州淺井田宮九尾州前安賀城主生害と
 とあり其起り秀吉あり此三人の武畧兼備り
 たる者あり懇に事問うと多し其聞え
 目出侍の常々寵を争ふ逆習折と得逆意ある
 様よ沙汰とよりてと見ゆ星崎籠城の人々
 岡田勝五郎坂井下總守赤川總左衛門尉林宗右
 衛門尉那須十右衛門同彦次郎那須隼人佐山口
 半左衛門喜田野彦四郎とあり
 家忠日記よ龍川三郎兵衛三人よ先なら伊賀よ

大月記九編卷十七

く使と以て三人秀吉志と通る由と告る
る信雄念て岡田とい土方彦三郎津川の飯田
半兵衛淺井の森久三郎とて誅せしむとあり
勢州松ヶ嶋と云い今松坂といふ飯高郡あり星
崎の尾州愛智郡前安賀の同知多郡あり

内府公と羽柴宰相再度梓楯の事
并濱松の信雄公の使者の事

内府公津川岡田淺井の三家老と誅せらる事忽
ふ大坂へ聞えしを秀吉卿以外の外に怒らる事
大息繼て申されける故右大臣殿三位中将殿御
事あり後御連枝の公達互に威を争ひあはる事

故右大臣家の御家督と奪ひあはんと御結構も
ありつる様と聞えし是は柴田龍川あといふ田
舎人の了簡といふものなりつこの道も右大
臣殿の御家督の三位中将殿より三位中将殿御
て被成し跡に三法師君より外に誰らあはると競望
をべけんは繼嗣者皆嫡相承といひ嫡子無きは嫡
孫と立と云本父ありとて知ぬ田舎侍の長子死
をいひ二男と立るとして家督の争論と起るとあ
り三浦の一族もいふ義明の長子太郎義宗の
母早とて故に總領と立び次男の義澄とて家督
といふ事新田足利の大祖たる足利義國の長子義

康つとむハ次男義重よしのりより二十歳長ながくあへと母はは卑ひしけき
 ハ弟あにとあさきたりあまきか正ただしき先蹤せんぞうありのり
 ふのむんや三法師君の御母ハ三位中將殿の御簾のり
 中ちゆうよあそしやうは何なにもへむけても御家督ごけとくは於おて更さら
 ふ異論いろんあるへううはその上うへふ今いまの御元服ごげんぷくもあり
 中納言ちゆうなごんあも任まかしあふのりあしと此君このきみを除をのぞて内府
 公こうと故右大臣家の御跡目ごせきめとあをへげんや此理このことを
 知したるハ此三人このさんにんとうりありけるのものと此三人このさんにん横よこ
 死しのちハ必定ひつてい内府公ちゆうふこうや兵へいと衣いこしと御家督ごけとく
 と奪うばらんとありあふあふめ内府公ちゆうふこうハ故右大臣殿
 の仰おほせより北畠きたはたの跡目せきめふありあふのものと何なにと

て取りへし織田殿の御跡式ごせきしきと申まをへげんやのりふ
 もいうふも田舎武士いんやぶしハ理ことと暗くらけきハ左様さやうの企くわを
 をとめ申まをののもあるへうう此三人このさんにんハあく此道このみち
 理ことととまへたるものなり内府公ちゆうふこうの僻事ひくことありあ
 ふとあしと諫いざなめしと今いまより後のちハ龍川りゆうせん三郎兵衛
 一人事ひとりことと執とらへけきハあふの悪事あくことととめ申まをへ
 然しからんといそのまうと棄すてあさ申まをへさあふび弓
 箭やととりてあふと謚し申まをさびハあるまうとさあり鳴な
 呼ようあしとさうか故殿ここのとのの御子達ごこどもたちのつとむと道理みちこと
 暗くらくやとさうとさハ内府公ちゆうふこうも三七殿さんじちてんの如ごとく終つひ
 ふいあふとあふとさうと二葉ふたはととて翦きとんハ斧きり

女聞記九條卷十七

柯と用ふるまふといふことより早く其處分をか
 との後悔その詮あるべしとて筒井池田以下
 織田家累代の侍大将達を催ふしけし又長嶋へ
 も秀吉卿の催促の趣をゆり聞えしうの龍川
 三郎兵衛内府公に申上げし羽柴秀吉をこしと
 御和平を破り軍勢を催促ししゆ由たりし申
 来るののあり必竟の三人のの共在命中のさま
 さまよふありし置ていひしよあり龍様の事も御
 耳に入ること遅くいひしある今此の事と誰
 も誰もくく不申の間速に披露申のの有之いと申し
 るより内府公以の外に驚きあひをあくんよの

上方侍近江美濃のののたとも味方よ参るま
 のうらとくとこと申あひびるまより三郎兵衛申け
 るの何さま丹羽五郎左衛門尉前田又左衛門尉か
 とも近頃秀吉と懇意ありゆくての御味方よ
 参り申やしし濱松の殿より故右大臣殿の御
 よりもい其上よ秀吉と親しくやしよの御
 頼あらん否との仰らるましく覺えし武畧よ
 於ての海道十五國よ肩とありある人あるま
 びと申勧めびるまより然に誰彼とのよ及ん
 三郎兵衛罷向ひて頼に奉るまよと言上とこと由
 定めしとけるまより龍川三郎兵衛あしひ旅の

用意をぬき遠江國へ參向と長嶋より濱松まで海
陸三十餘りを二日ふ打て濱松よりつくりけるふ折
篤濱松の君の鷹狩に出るをぬきけるより三郎
兵衛諏訪の社に參詣し神主松浦清右衛門信定り
許し一宿便宜と求めけるよ本多中務大輔忠勝
諏訪參詣の飯うけ松浦の家より寄けるより
龍川出會し長嶋より參りたる由と申けるよ忠
勝あり返り長嶋より何の為と御使をいさし
されゆゆらんと申げし龍川三郎兵衛本多り傍
へさしよりされゆゆ御聞もありつらん内府と秀
吉と近頃梓楯より及ひし處筒井順慶よりとらふと取

扱ひ無事よりゆゆの處三人の家老とも内々秀吉と
示し合をさすくの悪事とたくしゆと去る頃三郎
兵衛同道仕り大坂よりつくり秀吉より面會の時よ
の始末と探り出いて内府より申てゆと三人衆大
のさしより終り三郎兵衛と殺し可申ありと定め
ゆゆたりつり告知とるゆゆの有之よりつり其旨と
内府より申てゆゆの三人衆と城内より呼寄ひしと打
つりつりゆゆ然るゆゆと秀吉聞ゆゆか軍兵と催促
ゆゆゆゆゆゆ又注進申ゆゆのあり依て内府も其用
意仕るゆゆ存ゆゆ處内府とゆゆの秀吉と亡ゆゆ
ふゆゆ大將ゆゆ此殿より外よあるゆゆもふゆゆ間

大將傳六十七

一

内府の願奉るむしと御聞とけあるへくふしゆり
ふ被仰上被下い様たのし申と申けさの忠勝さて
て其条よいら承い今夜申へ因てまの枚浦の
許よ御休息あるへくいと申て本多の立りへり
の夜御夜詰の次よ言上しけさの殿の仰よその二
即兵衛と申のの北畠の一族木造御所の子あり
こも果報あく修験ありつる還俗したるあり
その身強健よ心も剛あるののとの務く聞食たり
翌日面會とて仰らさげさよう忠勝退出し
あうらひのふ様秀吉と信雄と軍をい何と勝へり
た〜信雄ハ秀吉のためよ主君あり主君と即從

と軍して勝たるため〜然ら信雄勝あへ
〜と思案〜ゆるり又あひひ〜ゆるり信雄ハ
秀吉の主よあ〜ゆるり信雄ハ信長の子か
〜とも庶子よて家督よあ〜ゆるり北畠の家
の嗣ありとて信雄ハ主人ありとあひ〜ゆるり誤
ハ出來るあり右大臣殿の御為よ盡と忠義とい
ひ山崎柴田の軍あり諸侍と引よとて体を見よ
天下ハ秀吉よ飯をん疑ひあり〜ゆるり
信雄うたの〜奉ると御聞入ある〜ゆるり
ま〜ゆるり天下の武將た〜ゆるり秀吉よ〜ゆるり
り從ひあむ〜ゆるり何とて秀吉う上

水戸記山編卷二十一

大内記山編卷二十一

十一

ふ立を^いあふへ^いさ^いり^いと^いて^い獨立^い秀吉と軍ふ^いふ
ふて^いの^い後々^いふ^い御心^いあ^いる^い處^いも^いあ^いる^いと^いあ^いふ^い
い^いら^いう^いて^い信雄^いり^い頼む^いと^い幸^いふ^い一^いあ^いで^いあ^いる^いと^いあ^いひ^い
その^いち^い和^い睦^いふ^いい^いひ^いた^いる^いん^いの^い三河^い武^い士^いの^い弓^い
矢^いと^い秀吉^いと^い得^い心^いさ^いと^いへ^いと^いあ^いり^いと^い仰^いら^いる^いか
ら^いめ^いと^い思^いひ^いげ^いる^い果^いし^いて^い翌^い日^い三^い軍^い兵^い衛^いと^いめ^いし^い出^い
され^い御^い同^い心^いあ^いる^いと^い由^いと^い被^い仰^いげ^いり^い

重修真書太閤記九編卷之十七終

重修真書太閤記九編卷之十八

尾藤甚右衛門尉説客の事

并片桐伊木異見の事

北畠内大臣信雄公津川玄蕃元岡田長門守淺井田
宮丸三人と誅^いし^いあ^いひ^いし^いら^いう^い勢^い州^い尾^い州^い濃^い州^いの^い諸^い士^い
土^い民^い等^い今^いよ^いの^い合^い戦^いの^い起^いる^いあ^いら^いん^いと^い安^いさ^い心^いあ^いく^い
資^い財^い雜^い具^いを^い山^い林^いへ^い持^いつ^いと^いひ^いた^いら^い亂^いを^いさ^いく^いる^い計^いを^い
の^いち^いあ^いら^いう^い自^い然^いと^い耕^い作^いと^い勉^いむ^いる^いの^いも^い少^いか
く^い先^い年^い三^い七^い殿^い羽^い柴^い秀^い吉^いと^い滅^いさん^いと^いて^い柴^い田^い龍^い川^いか
と^いと^い語^いら^いひ^い二^い度^いす^いて^い軍^いと^いあ^いひ^いし^いら^いう^いと^いも^い終^い

軍利ありあまつさへ織田家より鬼といふこと
柴田勝家も忽ち敗北して越前へ帰り三日をうり
の内へ滅亡し龍川一益も勢州と退去し三七殿の
野間の内海より生害あり先蹤遠く日と日夜
よ斯事と噂しひるよりの誰いふとなく大坂へ聞
えしうへ秀吉卿さもあるへ三人のののへ能の
のよ心得たる侍ともあり彼等うあらんうち北
畠との國と持たへてあへて早くよりあひしを
殿國と持とうへあへて早くよりあひしを
然あろう油断とへて非をとて恐ひし馬たる
ののよ數十人勢州長嶋へ下しあへて聞るる北

畠との龍川三郎兵衛と遠州濱松へ遣はるる趣
と聞出しけるよりの又忍びののの共と長嶋へ下
し龍川う下部よ身とゆつしあへて商人よあへ
らくあへて三郎兵衛と共に遠州へ出立たり
し路次よての事より遠州に至りての事實一
事もあへて聞えけり秀吉卿の事と聞えし信
雄の如き假令五人十人起りあへとも是と踏潰
さんよ何程の事うあへんあへとも我の朝廷の参
議あり彼の内大臣あり参議へ大臣の政を議論評
決とるると職掌とひ又當時の武將といふは幼稚
よまよまよと岐阜中納言秀信卿あり然るる内

大臣信雄軍勢と催促するの事あり加勢と隣國
より請ふに亂を招き災を醸とすといふにたゞ越
前近江國の丹羽五郎左衛門尉の領地あるに心易
し畿内へ我手元あるに更なるを置處あり只
美濃國の池田入道勝入父子の故右大臣殿の縁ふ
うし某とも從來の懇意ありし北畠とのとも又親
し此男のし北畠とのし一味をい美濃國の北畠殿
より從ふべし然らんよ於ては軍尤難義ありし然
しよのし池田父子の心中と探るべしとて尾藤甚右
衛門より一封の書と渡り池田父子當方へ合体をい
此書とすといふべしし異變ありし持歸るべしと

約束したる甚右衛門とあり濃州大垣よりこり
めくと告ぐに池田も懇意なる秀吉の使と聞か
つ其夜の旅宿を點してあれと馳走し翌日城中よ
請ひ對面しけるし甚右衛門一應の挨拶早くして後
申けるに今度北畠殿家老三人と誅しあひ其上よ
軍兵を催促し隣國の濱松へ加勢と乞ふふとたし
めし承り届けし定めて是へも御使のゆゑんら
入道殿の故右大臣殿と格別の御親しむに三位中
將殿と御嫡子紀伊守殿一方ありぬ御好しむに
岐阜の御為と思召いこんとし推量しつとも万々
一北畠殿より御一味より承り切て參ると秀吉の

申されていといへハ勝入齋心中ハ是ハ一大事あり
 容易ニ返事ありていといへハおのひいふられい
 北畠殿の事承り及ていといへともいふ某方へ
 御催促の廻文も参り不申い又中納言殿の御為を
 と存い事ハ年來の本意より更ニ別義あり然る
 めいたしうと申事いへハ明日一日御逗留あ
 るいの家老とも一評定仕りて後申へいとい
 て其夜ハ甚右衛門ウ旅宿ニ料理方の者ヲ遣い
 心ヲ盡しと馳走いへり甚右衛門も勝入齋
 父子の心中大低ハ大坂ニ一味と推察し其夜ハ心
 易く明るおとと待つ臥たりけりさして勝入齋

ハ家老ともと呼あつめ北畠殿軍と起いあとい
 るいあこの頃巷説ニ聞處あり定めて秀吉と打亡
 るいさんためいへ但秀吉後ハ知と今初と中納
 言殿の御為ハ聊も不實あり万事ハ行りりり
 と實ニ搔き處へ手の届くり大坂と岐阜と相
 去と四十里ニ及へり然る音信月ニ四度五度
 及ふといあとも二度り少ことハ絶てり又
 長鳴り岐阜すて二日路ニたり然る北畠殿
 りり岐阜へ音信の稀あること人々の知處あり是
 と以て思ひ競る北畠殿ハ中納言殿の叔父君
 におとすとも眞實ニ中納言殿と補佐して天

下と治めゆへに御本意といふれども只今秀吉と討てさんとすいあふいたとへの中納言殿の股肱と切をつらう如く幼稚の君とすいあふいと明暮よ心と副奉るへとよ龍はなきて結句鳥あふ羽翼と殺獸あふ蹄を去んとすいあふの中納言殿の御為と思召さるへとあふと推量らるたり因て此度長嶋より参るへと昔仰らる共参るへとあふあり其方ともい何とあふを所存とのあふび申切いへとあふ一時片桐半左衛門進出で申げるへ北畠殿秀吉と亡さんう為軍と起したまふと申と巷説いへうよひとと申い

へとも是へ仰らるることいほど但此方へ岐阜の御後見とて當城よあふまゆへに岐阜の御為と等閑ある御事あるまゆへに其道理いよ及ぶいよ北畠殿と秀吉と軍あふんよ何方へ御加らりと申さる北畠殿へ御合体あること從來の御好と申勿論うと存いと申ひとへ勝入齋然としくののいよ其時伊木清兵衛のまよ年若ありける片桐のいよと處その理聞えていよとも情世のありさまと考見いよ北畠殿の實よ天下と保たをあふへと主君とあふいよ其故の津川玄蕃元岡田長門守淺井田宮丸たとい秀吉と

懇意と通し共一應の吟味も及らば城中より召
 寄てたまし打よ打よとていこ大将の意よあは
 津川岡田淺井等と怖とあはれとたまし打よの
 あしむひし侍と侍と互に意趣ある時よ名乗りけ
 打よとていよ侍の本意と申をとも其人の知
 ぬやうに竊よめとて討たらんとい何と申此
 怯の振舞と刃彈とて申よあはれと此を以て考
 へいへい三人衆の無實よと殺されといのん
 とい抑大身の即従人の体よ取ての股肱よたと
 へ耳目よあぞらへいといたとも申よとてあ
 ひの家よ取て柱よたくとい股肱傷けいその人忽

み死し耳聾し目盲しとい廢人とありい又柱摧け
 てその家傾あはるためいあはれ龍をれい北畠
 殿と御助けいとも始終全うするまゝ早く秀吉
 よ御一味い岐阜の御為よ御力と盡さるゝとい
 と申い勝入齋何ともいとい奥へ入るい
 よより片桐も伊木もそのまゝ退出しけるよ其夜
 伊木と呼とて其方う申處實よ道理よりあひこり
 然に其用意とあはれと定めて長嶋より討手とむ
 けらるゝあはれと申されし清兵衛憚多と申
 条よいへとも清兵衛生ていちちの御心安うと
 くいと申て座と立たりし其跡へ勝入齋の日頃心

大月己の編巻一八

大陰言大陰師式部
安くしむ陰陽師式部といふの参りしうへよ
る處とやあゆむしけんりうの式部只今急よ申を
南と坤といふさう強さとありし時式部さんい天
正十二年甲申三月とうとくいへ九字あり即南
の離卦とて十二と三と合とて十五あり八引て七
あり即良の卦あり甲の一あり申へ九つあり合
とて十とある六引て四残る因て良の初六變とふ
と良の初六變の離より良と土と離と火とと良
へ少男離へ中女あり離へ火土人相害その象あり
良へ百謀阻ある象あり然し此節南方へ土人相
害とといふ土地の人と相残ひ害る事ありて

何事よるる阻あるへげし南方強しといひか
た坤と母と大腹人といふ訟といひ理順といふ衆
情よりあへりといひとて母の位よあといひ離の中
女良の少男とて其指揮に従ふへ然る時へ南
方坤方よ勝へりさる理顯然といふと申けるよ
り勝入齋のうよむくと云て志さうようかほさか
ひけり紀伊守之助りけり式部り言葉を聞
是たことよあるべ氏神の御告あるへり手あ
ひ口とて神拜とあけるといひ

池田父子尾藤甚右衛門尉よ約束の事
并濱松の御勢御進發の事

夜明しうへ尾藤甚右衛門尉起出顔あしひ髪うさ
あて今わ城中より迎の來ると待まるとあて伊木
清兵衛と使とて甚右衛門尉との御入いへと
申越けるより甚右衛門尉左あひひつること
て出立清兵衛と共に城に入けるより先に通つる
座敷より猶奥深き書院に請ひ池田父子とも打
そろひて甚右衛門尉に對面し此間宰相殿の仰の
趣とくと勘辨しその上み家老とも一同評義をと
けの處りつても正道の理に從ひひ方と申出い全
く勝入齋父子の存する處と同意よりつる畏奉る
より御請より頼奉ると申けるより尾藤も

大に悦ひ左ひて宰相殿より渡さとい封書の御
つと可申いとして一通の封書とて出ひより
勝入齋のとと請取開とて美濃尾張の守護と
して岐阜の御威光と遠く示しあへとありけるよ
り勝入齋も秀吉の厚意を感じ禮謝の状と一通
の誓紙と副たりしうへ甚右衛門尉も帰坂の上申
通をへと由と約して既に出達をんとすけるよ
勝入齋父子厚くめてあしをめぐへ今宵一夜つと
とめけるより其夜は大垣に宿しけるよ山海
の美味と盡とて肴幾種とつみりとも知ぬまて置
並へ酒へ御影寺の上作りものつみあしぬ釀し

た酔とも心地あやまのり亭主父子うそひく
めつらし品とととのへて盃のうとそと積り
しうの今へと甚右衛門尉いとよとあひて傍
りうふを沈のすくふ錦のとのあめの蘭麝の
包ひ馥郁とて劉阮う天台よのう仙女の許よ
宿りもめくやとおのふとうりやうとく
曉告る鳥の聲よあところうとて臥處とりのまの朝
のののこあくと調てうと居たり甚右衛門尉いと
と認めとるるあう勝入齋父子ともよ立りて今
をこころめ奉りたくいへとも大坂よとまを
あそんともとてうとおのふと故よあても申

されをいせめて寐ののめり追と存せれとも路
つとてこの樽井關原よと御名残あしと申アと
云つと送りよ立出たりそれのそあうば美農の上
品繪百端とらう皮籠の蓋のとてうぬすてよあ
入て是の鹿々しげと此國よと來りあひしとる
しよ參とるる宰相殿への關鍛冶のよとひあ
切味とらうよとの和泉守兼定關兼滿兼常の類
まの赤坂千手院岩捲あと取よと各廿腰つと獻
上あうしうの秀吉卿も池田父子一味のうへ美
濃尾張へ出陣のたうよと大よあふとれ
となうそのうち池田父子へ無二の大坂方とあう

しうのちの勢州の容子と伺ひけるは岩崎峯の城
松ヶ嶋のつとも開城し及ひし由聞えけるは
叔の北畠殿いふく秀吉と有無の一戦あるへく思
召定めしと知しとさあらんよの勝入齋父
子も尾州犬山の城と攻取て武勇の如と示し
つ秀吉へ一味の證據とあるとて伊木清兵衛
以下よ下知しとその用意とありたり

尾州丹羽郡犬山城の信雄方中川勘右衛門守
る處峯城の伊勢安濃部あり信雄方佐久間駿河
守正勝守る處天正十二年三月十日正勝蒲生
長谷川日根野等と攻らんとて開城と岩崎の尾州

愛智郡丹羽氏次の守る處あり浦菴本池田と信雄
と與力をくくおのひし處伊木清兵衛の勧めよ
らうて秀吉と同心とありとありの處へ津田隼
人佐と濃尾三の三ヶ國と領納をらるる
とある上巻の誓紙とありけるは秀吉へ同
心したる清兵衛は三月十日の夜勝入齋と密談
数刻し及ひしち餘同心と極まうし由披露あ
うと見ゆ

森武藏守長一へ勝入齋のむめよよりて是も秀
吉の味方と参りしうの郡上の遠藤但馬守も同
く大坂方とありたり然るは遠羽濱松とての故

右大臣信長公の御好と今よ至るを忘とあるは
さるるにありて内大臣信雄公より御頼とありける
と速に御承引ありしに御普代の面々つのも
取々よ用意して天正十二年三月七日濱松を御發
途あり其夜八里半ありて三州吉田より御八日岡崎より著
せらるる後陣の勢と待付矢矧より陣列と御定めあり
りて九日熱田の宮より御參詣十日清洲より入御あり
まぬ先陣へ酒井左右衛門尉忠次本多平八郎忠
勝榭原小平太康政井伊満千代直政大須賀五郎左
衛門尉康高松平家忠奥平信昌松平又七郎家信松
平但馬守内藤信成三宅惣右衛門康貞女藤彦四郎

本多作左衛門大久保水野忠重等として遠三の御
家人壹万五千餘騎と聞ふ
流布本より景勝の押より菅沼小大膳小笠原掃部大
夫信州諏訪より松岡刑部諏訪安藝守木曾左馬頭
義昌等也佐久郡小諸より芦田下野守柴田七九郎
甲府より平岩七之助親吉郡内より鳥居彦右衛
門元忠北条の押より駿州沼津より松平周防守康
親牧野右馬允康成興國寺深澤の若より松平玄蕃
頭清宗三宅惣左衛門等あり田中久野より高力
與左衛門久野三郎右衛門宗能濱松の御留守より
大久保七郎右衛門兄弟水野織部正三州岡崎

の城も本多作左衛門内藤三左衛門石川日向守
康成等ありりゆりゆり處々へ御勢と引とけあへ
へ御先手の大将松平主殿助家忠大須賀五郎左
衛門康高中軍も御旗本後陣も榊原小平太康政
本多平八郎忠勝游軍も奥平九八郎信昌松平
又七郎家信以下一万五千余騎と見ゆ
又按ふ此時御本陣へ尾張國春日井郡小牧山ふ
り榊原小平太康政の言上をい處より酒井左
衛門尉忠次其地理と考へ御陣とありたりと
あり又清洲より内藤三左衛門尉信成三宅惣左
衛門尉康貞大澤兵部大輔基宿安藤彦四郎直次

とありりゆりゆり流布本も内藤三左衛門と岡
崎御留守のゆりゆり加えり誤あり三宅總右衛
門と興國寺深澤の砦も籠らりり誤あり
り又本多作左衛門尉重次尾州愛智郡星崎の城
と守りりゆり流布本岡崎御留守の内も加あり
へ誤あり

然るに九日の朝信雄の兵佐久間駿河守正勝山口
長次郎重政五千余騎と率ひ佐沼新助も籠りり亀
山城も發向り城下と放火り嶺の古城も搦て秀吉
と防りんとび秀吉の兵蒲生忠三郎長谷川藤五郎
日根野龍川等の與力嶺の城と攻りりり正勝もく

戦へともめあはる開城ととのひ十一日犬山の守
将中川勘右衛門池尻平左衛門を為し殺さしと
聞池田勝入齋犬山へ元より城ありとてあそと取
めへさんと謀り十三日勝入齋大垣より来りて
犬山を取といひ十四日酒井左衛門尉忠次松平
主殿助家忠と先陣とて来名より向て一處犬山
落去の告あるより一部川より引返り酒井
松平兩人と来名より留めとのあそりと巡見とい
ふ十七日森武藏守長一尾刈丹羽郡羽黒陣を羽
黒の犬山と小牧との間あり酒井左衛門尉忠次森
陣と伐んと請へ處御許容あり此日森り手の野

呂助左衛門松平又七郎家信と戦て終り死を森武藏守
敗走と助左衛門子助三あはる返り合きて戦死を
同廿一日秀吉大坂に進發あり其勢十二万余騎といひ先
陣墨股赤坂垂井といひるより後陣醍醐山料宇治勢田小充
満と

醍醐より墨股より凡廿九里許あり十二万の人を配り
一里小四千百三十余人あり是と三十六より九百十四人余
みあはる是と六十より九十九となる即は一間一人
九多つ立法あり行軍の法と知へ
廿六日秀吉美濃路より入り廿七日犬山小着あそと
墨股の笹塚といふ處あり又の猿塚とも云ひ大閤

中村藤吉郎といひ一時の塚のりありあてりと眺望
 していつく此の軍勢と屯をんよの十万余の兵を置下
 その兵を以て尾州と攻んよの起りあてると向て軍を挑
 ひそく笠松より犬山より攻入へるとなりといひけ
 ると聞きの又例の猿ゆ何をういふと云て心よ止め
 のもあつりいふ其内よ老人一人あれと聞耳とてあ
 居ける其子我老う此人の其事と成を見とてあてり其
 方よ覺え居あ何り益ありと云とてなり其子あてり父
 のいふことと保ち太閤あてり至と見ると其子馬の香と
 多くうとて犬山道あてり是と賣大よ利と得るといふ

重修真書太閤記九編卷之十八終

